

## 仲宗根豊見親「八重山入の時あやこ」私訳解

—鎮まり治まって豊んだのは宮古嶋だった—

下地 利幸（宮古郷土史研究会会員）

### はじめに

『雍正旧記』（1727年）「嶋中の為メ勲功有之候人由来」の項に収載される「同人（仲宗根豊見親）八重山入の時あやこ」を慶世村恒任・稲村賢敷両氏の解釈を検証しながら、私訳解（このことでなに見えてくるものなのか）を試みることにする。

### 同人八重山入の時あやこ

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 一、 空広か 豊見親の あやことそ    | 二、 おきなから 美御前から 美御声   |
| 三、 空広よ 宮古とな免て やまれば   | 四、 豊見親を 嶋とな免て やまれば   |
| 五、 我宮古む 大宮古む 津かやん    | 六、 大八重山の 下八重山の 人よ    |
| 七、 返せ見ま 戻せ見ま  तरीいば  | 八、 返されの戻されの 祢当さから    |
| 九、 十百その 十百さの中から      | 十、 手まさりやは 手とよめやは撰    |
| 十一、大平良 大むか（そ）ねから屋た   | 十二、中屋金兄の 金盛とよ        |
| 十三、堀川里 こむり里ならとよ      | 十四、上ひ屋里 東里ならとよ       |
| 十五、大川盛 与那覇むむ当らとよ     | 十六、崎原の西崎の かあらもや      |
| 十七、すみや大津々の主 津かさと     | 十八、あれや生り 不こり殿大不ちと    |
| 十九、金志川の豊見親 金盛とよ      | 二〇、城なき弟 なき当つとよ       |
| 二一、砂川あふかめ 津ツの主とよ     | 二二、下地生れ もてやにきやもりとよ   |
| 二三、川根の まんいりのまんきやりとよ  | 二四、来間生り ワリミやのとのとよ    |
| 二五、野崎生れ 赤宇立親とよ       | 二六、伊良部生れ 國仲のままらとよ    |
| 二七、よかい生れ 屋ちのおまのこことよ  | 二八、神まさりや いはんとのおもとよ   |
| 二九、池間生れ 上ましのけさとよ     | 三十、はなれ生れ 尻の座のすんとよ    |
| 三一、磯はなの はけ嶺のまんきやと    | 三二、かりまたの ミなこ地のごもりやと  |
| 三三、か祢屋 大津々の主津かさと     | 三四、大神生り 豊見かねせとらと     |
| 三五、土原の 内原のおそろと       | 三六、いくさはな 不あらはなよ いらへ  |
| 三七、大八重山ん下八重山ん へやれいけい | 三八、いくさミやを不あらミやを すせはと |
| 三九、あけず舞を はへら舞を さをとれ  | 四〇、前手んな 百さるき たうせは    |
| 四一、尻手んな 百かなき たうすは    | 四二、与那国の島向ん へありいけいは   |

四三、与那国の いきはての 鬼とら  
四五、空広か 足なけい ミやはて  
四七、返す見と 戻す見と 豊ミヤ  
四九、我刀 治金丸 請見ル  
五一、鬼とらを 草ふきたけ たうすは

四四、いき向ひ へい向ひ 立とれ  
四六、豊見親の ひさなけい ミやはて  
四八、あん屋らは おワ屋らは 鬼とら  
五〇、声掛は 言とのいは にふさせ  
五二、おんそよく 嶋鎮 豊たれ

## 1 「同人八重山入の時あやこ」私訳解

〇一～二節、「空広か 豊見親の あやことそ／おきなから 美御前から 美御声」  
慶世村恒任『宮古史伝』の解釈（以下〔史伝〕）

空廣といふ豊見親のアヤゴをばせう 沖縄から、尊きあたりからのお声がかりで  
稲村賢敷『宮古島庶民史』の解釈（以下〔庶民史〕）

仲宗根豊見親の歌をうたおう 沖縄の御主がなしの御声がかりで

<私訳解>

〔史 伝〕、〔庶民史〕の解に拠る 仲宗根豊見親に沖縄の王様からのお声がかり（御命令）  
があった。

〇三～四節、「空広よ 宮古となめて やまれば／豊見親を 嶋となめて やまれば」

〔史 伝〕 空廣を宮古一般に崇め居れば 豊見親を、島中、崇め居れば

〔庶民史〕 豊見親は宮古を治め整えたから 豊見親は島を治め整えたから（稲村賢敷  
『宮古島旧記並史歌集解』の解釈（以下〔史歌集解〕）宮古を平らかによく治  
めなさいとの仰せでの意）

<私訳解>

空広よ宮古をとなめよ（整え平らかに治めよ）との仰せであれば 豊見親へ嶋となめよ  
（島を鎮め平らかに治めよ）との仰せであれば となめ（とうなみ）平らかにする。整え  
鎮める。おきなわ（首里御主がなし）から「宮古島を整え鎮めよ、平らかに治めよ」との  
仰せ（命令）があった。（宮古島が鎮まらず騒動していた？）「史伝」の「豊見親を、島中、  
崇め居れば」は、私にはよく理解できないものがある。三～四節の句詞からどうしてその  
ような意識となるものなのか、稲村「庶民史」も「豊見親は島を治め整えたから」とする  
がこれもどうであろうか、「史歌集解」では「宮古を平らかによく治めなさいとの仰せでの  
意」としている、ここは「史歌集解」の解釈が句詞の意にかなうように思われる。

〇五～六節、「我宮古む 大宮古む 津かやん／大八重山の 下八重山の 人よ」

〔史 伝〕 我が宮古も、大宮古も、栄えている 大八重山の、下八重山の人を

〔庶民史〕 我が宮古もよく行った 大八重山島の人々から（〔史歌集解〕 吾が宮古島は

よく栄えて居りますの意)

<私訳解>

我が宮古、大宮古に、つかない（従わない、叛逆する）／大八重山、下八重山の人（オヤケア赤蜂）から

（1）仲宗根豊見親とオヤケ赤蜂の対立があった（「八重山の人」はオヤケ赤蜂）

「史伝」「庶民史」ともにここでの解釈はおかしなものがある。「史伝」は五節の「津かやん（津かん）」を「栄えている」と意識するが、どのような理解でもってそうなるものなのか判然としないものがある。「庶民史」は五節を「我が宮古もよく行った」と意識するが、これもまたなぜそうなのか、私にはよく分からないものがある。稲村は「津かやん」の句詞を「庶民史」ではそのまま「つかやん」とするが、「史歌集解」では「さかやん」に修正している。これは「我が宮古もよく行った」を「吾が宮古島はよく栄えて居りますの意」

（「史歌集解」）とする、そのための修正だと思われるのであるがはたしてどんなものであろうか。私には、五節の「津かやん」が六節の「大八重山の 下八重山の人よ」にかかる句詞であれば、「(かつては) 我が宮古 大宮古に (つき従っていた八重山が) つこうとしない (従わない、従わないどころかかえって叛逆まで企てる) 大八重山、下八重山の人から」と解するのが次節ともかかわって句詞の意に添うもののように思われる。

○七～八節、「返せ見ま 戻せ見ま तरीいば／返されの戻されの 祢当さから」

〔史 伝〕 攻めよ討てよと（命令）あれば （前回に）攻め得なかつたうらみから

〔庶民史〕 見返され戻されたので 見返された憎さ故に（〔史歌集解〕 両句の意味は明らかでない。多分戦いの際の軍使の口上のようなもので、使者を遣わして此方の条件を述べさせ、これに対して先方から抗議を言ってくる。これに依って愈々戦争になる所謂戦陣の挨拶のようなものらしい。）

<私訳解>

（宮古へ）返し見ま（返って見ておれ） 戻し見ま（戻って見ておれ）と言われて／（見返され、あなどられて）返された 戻された そのあまりのにたさ（憎さ・恨み）から

「八重山入りの時あやこ」の五節から八節までの句詞を、このように宮古と八重山が緊迫し、対立する関係にあったと解したときに、忠導氏家譜が記録する「時に玄雅、八重山島に航し、彼の島の酋長を諭し、相共に附庸の職分を守り、年々貢物を定めて、中山に朝貢し、臣子忠誠の意をつくさんと欲す。時に大浜赤蜂兄弟自らの武勇をたのみてこれを肯せず、かえって叛逆を企て宮古島を襲わんことを謀る。これによりすなわち中山に赴き赤蜂等謀叛の意趣を訴う。」の記録が、この句詞の意味合いと全く重なって見えてくる。

「史伝」の意識「攻めよ討てよと（命令）あれば、（前回に）攻め得なかつたうらみから」

をどう見たものなのか、忠導氏家譜の記録「弘治年間、八重山島退治の時、兵船を遣わしこれ（与那国島の首長鬼虎）を攻めしむ、然れども兵船津口に入る能わずして、空しく帰帆するなり、故に今、玄雅に命じ、これを討たしむ」をもってしての意識だと思われるのだが……。『与那国の歴史』（池間榮三 1972年）は、この五節から八節までを「史伝」の意識をうけて「我大宮古は榮えています。大八重山の下八重山の与那国島を、かつて攻め入ったことがあるが、失敗に終わったので、その残念さから、今度こそは」と意識するのであるが、これもまたどんなものであろうか。私には七～八節の句詞が「与那国島（鬼虎）」をいっての句詞だとは到底思えないものがある。

「忠導氏家譜」の八重山追討の記録は、「八重山入の時あやこ」が王府へ謀叛を企てる八重山のオヤケ赤蜂、その赤蜂を仲宗根豊見親が王府軍の先導となって見事に討ち治めるその大なる事績（勲功）を歌った「あやこ」であることを思わせるものがある。仲宗根豊見親の勲功を記す『雍正旧記』の「島中の為メ勲功有之候人由来」が、「……豊見親嶋の主に成り候付き神水のあやこ并八重山嶋討治め、両嶋共に上納仕り候あやこ之有り候」といって、このアヤゴを「同人（仲宗根豊見親）八重山入の時あやこ」と記すのもそのこと故だと思われる。

「史伝」は「同人八重山入の時あやこ」の表題を「仲宗根豊見親与那国攻入のアヤゴ」と改題し、「庶民史」も「仲宗根豊見親与那国征伐のあやぐ」だとしている。両氏ともに、「同人八重山入の時あやこ」を、「八重山入り」ではなくて直ちに与那国に攻入って鬼虎を征伐した、そのことをうたった「あやこ」だとみでの改題なのであろうが、しかしはたしてこのようなことがあっていいものなのか、郷土史の偉大な先達、慶世村恒任・稲村賢敷をして敢えてこのことは問わなければならないものに思われる。

八重山追討（オヤケ赤蜂征伐）を仲宗根豊見親の勲功として歌う「八重山入の時あやこ」、しかしこのことは王府への憚りがあってか、オヤケ赤蜂は「八重山の人よ」と暗示的に歌われて「八重山入り」は与那国島の「いきはての鬼とら」征伐へと向けられた、鬼虎もまた宮古では「与那国の鬼虎」ではなく「ヤマウントウラ（八重山鬼虎）」と通称されている。このようなことなどを思ってみたりする。

○九～十節、「十百その 十百さの中から／手まさりやは 手とよめやは撰」

〔史 伝〕 （今こそは）千百人（数知れぬ）の、その中から 手練の者、手際まさりの者をば選んで

〔庶民史〕 百千の人々の中から 勝れた精兵をえりぬいて（〔史歌集解〕「手まさりゃ、手とよみゃ」は武芸のすぐれた者のこと。）

<私訳解>

〔史 伝〕、〔庶民史〕の解に拠る

「八重山の人」（オヤケ赤蜂）に余計な口出しをするなど追い返された仲宗根豊見親は、これを恨み、中山王府に赤蜂謀叛の企てであることを訴えて、自らは宮古中から手勢の精兵を集め王府軍を先導して八重山島へ押し渡る用意をした。

「弘治年間の頃、八重山島謀叛の企てこれ有り候付、琉球へ訴え奉り候処、討手の御大将當島（宮古島）へ御下り成られ候間、御供達にて八重山島へ罷り渡り、与那国まで討ち治め申し候」（「雍正旧記」<島中の為、勲功これ有り候人の由来>）

○十一～十二節、「大平良 大むか（そ）ねから屋た／中屋金兄の 金盛とよ」

○十九～二〇節、「金志川の豊見親 金盛とよ／城なき弟 なき当ツとよ」

○二一節、「砂川あふかめ 津ツの主とよ」

○三五節、「土原の 内原のおそろと」

（十一節から三五節までの解釈は略す）

「十一節から三五節までは是等島内各地から選ばれたすぐれた武芸者達の出身地及族称、名乗を述べたもの」（「史歌集解」）、宮古各地から発せられた「手まさりやは 手とよめや（武芸者）」は20人、神女4人（すみや大津々の主津かさ、砂川あふかめ津々の主外）、「忠導氏家譜」は与那国鬼虎の追討では、父の玄雅に随って嫡子金盛、二男祭金、三男知利真良も加わったとあるが「八重山入の時あやこ」では、何故か嫡子金盛のみが名揚げされて、二男祭金、三男知利真良の名は出てこない。アヤゴが先に謡われて家譜は後にこのことを記録したものであれば、考えられるのはあったものが後に脱落したのか、元から歌詞になかったのか、そのどちらかであろうが脱落は考えにくいように思われる、元からなかったものなのかも知れない。アヤゴは祭式の場で歌われた、「アヤゴは英雄の事績をうたった英雄叙事詩、英雄の功績をたたえた歌で、祭事に歌われた」（稲村「史歌集解」）。仲宗根豊見親にかかわって祭事が行なわれ、そこでアヤゴが謡われたのであれば、何のための祭事であったのか、二男祭金、三男知利真良の名が出てこないのは、この「八重山入の時あやこ」が祭事で歌われた、そのこととかかわってのことであるように思われるものがある。

○三六節、「いくさはな 不あらはなよ いらへ」

〔史 伝〕 （是等）軍に好適な人々を選び

〔庶民史〕 いくさ自慢腕自慢の者共を選び

<私訳解>

〔史 伝〕〔庶民史〕の解に拠る

○三七～三八節、「大八重山ん 下八重山ん へやれいけい／いくさみやを 不あらミヤ  
を すせはと」<※（「史伝」）三八節、「与那国の島ん 走り行き」>

〔史 伝〕 大八重山に下八重山に馳せ行き 与那国の島に馳せ行き（謀りをめぐらして  
軍を——戦を——したら

〔庶民史〕 八重山の島に打ち渡り いくさ勝負、いくさくらべをした

<私訳解>

〔庶民史〕の解に拠る

「大八重山 下八重山ん へやれいけい」は、六節の「大八重山の 下八重山の人よ」と重なる句詞であって「大八重山、下八重山」が八重山島のことであることは論をまたない。ところが「史伝」は、この「あやこ」の後段四二節で歌われる「与那国の島向ん へありいけいは」の句詞を、「与那国の島ん 走り行き（与那国の島に馳せ行き〔謀りをめぐらして〕）」と訳して、いきなりこの三七節の「大八重山 下八重山ん へやれいけい」の後に続く歌詞として挿入している。これは先の七節「返せ見ま 戻せ見ま तरीいば」を「攻めよ討てよと（命令）あれば（前回に）攻め得なかつたうらみから」と意識し、「八重山入の時あやこ」は直接に与那国島の鬼虎を攻め入ったあやこだと解釈する、そのことによってする極めて意図的な挿入（解釈）であるように思われる。

○三九～四〇節、「あけず舞を はへら舞を さをとれ／前手んな 百さるき たうせは」

〔史 伝〕 （先ず）蜻蛉の舞い、胡蝶の舞を躍り（敵を騙して）（愈々）大手には百突  
きに突き立て

〔庶民史〕 蜻蛉や蝶のように舞い躍り 前に百人を斬り倒し（〔史歌集解〕「あけず」  
は蜻蛉こと、「はべる」は蝶々のこと 剣を振り廻して戦っている有様を美  
化して「あけず舞」「はべる舞」と言う。）

<私訳解>

〔史 伝〕、〔庶民史〕の解に拠る

「あけず舞を はへら舞を さをとれ」これは実際の戦いの場面をいうものなのであろうか、私には、神前において戦いの場面を再現した一定の様式化された表現のようにも思われるものがある。

○四一～四二節、「尻手んな 百かなき たうすは／与那国の島向ん へありいけいは」

〔史 伝〕 搦め手には百薙ぎに薙ぎ倒せば

〔庶民史〕 後方には百人をなぎ倒し 与那国の島に走り行き

<私訳解>

〔庶民史〕の解に拠る

「史伝」は四二節の「与那国の島向ん へありいけいは」を、三七節の「大八重山ん 下八重山ん へやれいけい」に続く句詞としたことで、ここではその整合性をはかる必要からか、「与那国の島向ん へありいけいは」の句詞は抜かしている。しかし「八重山入の時あやこ」のここでの句詞は、「尻手んな 百かなき たうすは／与那国の島向ん へありいけい」で、「後方には百人をなぎ倒し 与那国の島に走り行き」とする（「庶民史」）の解によるべきであろう。

○四三～四四節、「与那国の いきはての 鬼とら／いき向ひ へい向ひ 立とれ」

〔史 伝〕 与那国の——いや極てなる鬼虎は 馳せ来たって立ち向かい

〔庶民史〕 与那国の行涯の鬼虎とやら 行き向かって（〔史歌集解〕「いき向かい、へい向かい」は此方から進んで行くのに向かって立ち向かっていたというのである。）

<私訳解>

与那国の行涯の鬼虎は（来たか豊見親よと）／行き向かって、へい向ひ（堀・壁のごとくに）立ちはだかって「へい向ひ 立とれ」の「へい」は「睥睨する」（横目で見る、じっと観察しながら、相手の出方をみること）に通じる詞にもとれるものがある。与那国島は「与那国の（いきはての）島」として「大八重山 下八重山」の八重山とは明らかに別の島とされている。「八重山入の時あやこ」を、仲宗根豊見親が直接与那国島に出向いて鬼虎を征伐したことをうたった歌とする「史伝」の解釈は、「忠導氏家譜」の鬼虎の記録をもつてしての一方的な解釈であったように私には思われる。

○四五～四六節、「空広か 足なけい ミやはて／豊見親の ひさなけい ミやはて」

〔史 伝〕 空広の足をはねとばして、そして 豊見親の膝を、はねとばして、そして

〔庶民史〕 空広の技つかい様子 豊見親の腕使い様子見てとり（〔史歌集解〕「み（ミ）やは」は較べる意、現在は「みやーさ」と言っている、自分と豊見親とどちらがすぐれているかを較べようというのである。）

<私訳解>

空広の、その足元をじっと見やりながら／豊見親のひさ（びさ・足元）を見やりながら、「足なけい ミやはて」「ひさなけい ミやはて」は対句になっている。稲村は『「み（ミ）やは」は較べる意、現在は「みやーさ」と言っている、自分と豊見親とどちらがすぐれているかを較べようというのである』（「史歌集解」）と解するが、ここでは「じっと見やって」の意ととるのがいいように思われる。

○四七～四八節、「返す見と 戻す見と 豊みや／あん屋らは おワ屋らは鬼虎」

〔史 伝〕 「どうだ!討ちかかってみろ豊見親! 左様か、それならば鬼虎」

〔庶民史〕 いざ参れ豊見親と声かけたので さらば鬼虎とやら（〔史歌集解〕「返す見ど、

戻す見ど」は戦いの際の掛け言葉で、鬼とらから呼びかけて来たのである。)

<私訳解>

返すまいぞ、戻すまいぞ、豊見親／そうか、そうであれば鬼虎よ（鬼虎は豊見親のひさ〔びさ・足元〕を見やりながら、その足で二度と宮古島に）返すまいぞ、（今度は）戻すまいぞ豊見親よ、と威嚇し立ちはだかった（前回戻した、追い返した〔七節の「返せ見ま 戻せ見ま てりいば」〕をうけての反復語)

(2) 「八重山の人」と鬼虎は同一人物に思われるものがある

豊見親を追い返した「八重山の人」と鬼虎は同一人物に思われるものがある。四五節から四七節の「史伝」、「庶民史」の解釈（意識）はともに全克的を得たものとはなっていない。このことは慶世村、稲村両氏が四五節から四七節の句詞の意味を、この「八重山入の時あやこ」の全篇の中でとらえていない（特に七節、八節との関連の中でとらえていない）、このことに起因するもののように私には思われる。

「史伝」は「足なけい ミやはて、ひさなけい ミやはて」を「足を、はねとぼして、膝を、はねとぼして」と意識するが、「ミやはて」がなぜ「はねとぼして」の意となるのか、また「ひさ」は「膝」ではなく、四六節が、前節の「空広か 足なけい ミやはて」に続く句詞（対句）であれば、「ひさ」は「びさ・足元」の意であるはずである。「庶民史」の「空広の技つかい様子、豊見親の腕使い様子見てとり」もどうであろう、この句詞をしてなぜにそのような解釈（意識）となるのか、稲村は「史歌集解」で、四七節の『「返す見ど、戻す見ど」は戦いの際の掛け言葉で、鬼とらから呼びかけて来たのである』と解釈する。掛け言葉といえばそれは掛け言葉なのであろうが、しかしそれは歌の心意を履き違えた解釈であるように私には思われる。

四七節の「返す見と 戻す見と 豊ミヤ」の句詞は、七節の「返せ見ま 戻せ見ま てりいば」が前提にあつての句詞である、私はそのように理解する。七節・八節の「返せ見ま 戻せ見ま てりいば 返されの戻されの 祢当さから」を稲村は「庶民史」で「見返され戻されたので 見返された憎さ故に」と意識し、「史歌集解」では「両句の意味は明らかでない。多分戦いの際の軍使の口上のようなもので、使者を遣わして此方の条件を述べさせ、これに対して先方から抗議を言ってくる。これに依って愈々戦争になる所謂戦陣の挨拶のようなものらしい。」と言っている、両句（七・八節）の意味ははたして「明らかでない」のだろうか。私には「史歌集解」の解釈をみる限りにおいては、稲村はどうも読み違いをしているように思われるものがある。

私は七・八節の句詞を次のようにみてきた。仲宗根豊見親は「大八重山、下八重山の人（オヤケ赤蜂）」から「(宮古へ) 返し見ま (返って見ておれ) 戻し見ま (戻って見てお

れ)と言われて(見返され、あなどられて)返された 戻された そのあまりのたさ(憎さ・恨み)から」と、七・八節をこのようにみてとれば、四五～四七節の「空広か 足なけい ミやはて／豊見親の ひさなけい ミやはて／返す見と 戻す見と 豊ミヤ」の意味もまた自ずと明らかであるように思われる。

与那国のいきはての鬼虎は、前に仲宗根豊見親が八重山へ来た時は「(宮古へ) 返し見ま (返って見ておれ) 戻し見ま (戻って見ておれ)」と追い返したが、今度はそうはいかないぞと、「空広の、その足元を見やりながら、豊見親のひさ(びさ・足元)を見やりながら、(その足で二度と宮古島に) 返すまいぞ、戻すまいぞ豊見親よ」と立ちはだかった。「あやこ」の句詞を方音で読み取っていけばこのように解されるものであるはずである。

然して四五～四七節の「空広か 足なけい ミやはて／豊見親の ひさなけい ミやはて／返す見と 戻す見と 豊ミヤ」の句詞が、七・八節の「返せ見ま 戻せ見ま तरीいば／返されの戻されの 祢当さから」のやりとり(対立)があつて、そのことを受けての句詞だと見られるのであれば、七・八節で豊見親を追い返した「大八重山、下八重山の人(オヤケ赤蜂)」と、「いきはての島、与那国」で、仲宗根豊見親に立ち向かう「鬼虎(ヤマウントウラ)」とは、まさしく同一人物だということになる、「あやこ」の句詞からはそのように思わせるものがある。

私はいま「八重山入の時あやこ」の「与那国の鬼虎」の姿を、仲宗根豊見親を追い返した「八重山の人(オヤケ赤蜂)」と重ねて見ている。「いきはての島、与那国」で鬼虎を討ち果たした(征伐した)とする、この「あやこ」は、宮古・八重山与那国の歴史にあつて実際にあつた出来事をうたつた「あやこ」であつたのか、つまりは「与那国の鬼虎」は、はたして実在した人物であつたのか、「鬼虎」の姿その実態もまた、当の与那国島にあつてようとしてつかめないままである。このことはなにを意味するものなのだろうか。

「八重山入の時あやこ」でうたわれる「与那国の鬼虎」は、私には仲宗根豊見親がそののつびきならない事情から、その解決のために、八重山のオヤケ赤蜂征討の歴史的イベントをもって、その場面を与那国島に移し「鬼虎(ヤマウントウラ)征伐」に仕立てた、そのことをうたつた「あやこ」であつたように思われるものがある。(八重山嶋へ押し渡りオヤケ赤蜂を討った仲宗根豊見親は、この時に「与那国まで討ち治めた」と「雍正旧記」は記録している。)

「八重山入の時あやこ」は八重山で仲宗根豊見親を追い返した人物を「八重山の人」というのみで、中山王府への配慮からだろうか「オヤケ赤蜂」がどうのとは全く言っていない。中山尚真王は1500年、大里、銭原等を將に「戦船四十六隻、兵三千余」を發し、仲宗根豊見親を先導と為して八重山へ押し渡りオヤケ赤蜂を征伐した(『球陽』)。八重山の

「オヤケ赤蜂」征伐は王府側の軍旅でなされたものであって、仲宗根豊見親はその先導役（水先案内）を果たしたのであった。このことへの配慮があつての直接表現をさけた「八重山の人」だったようにも思われるものがある。

（3）「八重山入の時あやこ」は祭式の間でうたわれた

「八重山入の時あやこ」で名揚げされる「20人の手まさりや（武芸者）と4人の津かさ（神女）」、この人たちもまたそっくりそのまま仲宗根豊見親に率いられて与那国まで攻め入ったのだろうか。アヤゴで歌われるように八重山を打ち負かして、その勢いですかさず与那国まで攻め入ったというのであればそれもうなずけようが、それが八重山入りから22年後（稲村が説く12年後であっても）の出来事だったというのであれば、それはほとんどあり得ないことのように私には思われる。

それがそのままあつたこととされて今日まで伝えられてきたのは、この「八重山入の時あやこ」が1500年に実際にあつた「八重山入り（オヤケ赤蜂追討）」という出来事をもってして、仲宗根豊見親が（またその一門が）その必要性から、「王化に従わず叛逆する与那国の鬼虎」を現出させて（このことは王府に叛逆し謀叛を企むオヤケ赤蜂とそのまま重なるものがある）、その征伐を仲宗根豊見親が王命を奉じて成し遂げた。その功績を讃える歌として、祭式の間でうたわれ願いあげられた「あやこ」だったからだ、私は今そのように考えている。（王命を奉じて鬼虎を征伐したとする記録は、忠導氏家譜がそう記すものであつて王府の記録にあるものではない。そもそも王府の記録にはオヤケ赤蜂征伐のことはあつても鬼虎征伐についての記録は一切ない。）

〇四九～五〇節、「我刀 冶金丸 請見ル／声掛は 言とのいは にふさせ」

〔史 伝〕 我が刀、冶金丸を受けて見る！ と掛け声も言う言葉も遅しと（掛け声諸共に）

〔庶民史〕 我が刀冶金丸請けみる 声をかけるのが遅し

<私訳解>

〔史 伝〕、〔庶民史〕の解に拠る

声掛けもおそしと、「あんやらば うりやらば 鬼虎よ、我が刀 冶金丸 請みる」と高らかに呼ばわって冶金丸を打ち下ろす仲宗根豊見親の躍動する姿が見られる。この場面は、じっさいの戦いの様子というよりも祭式の間におけるひとつの儀式的な場面を思わせるものがある。この時の冶金丸は、先に尚真王に夜光の宝玉とともに献上したものを、「特に恩借賜り」戦いのぞんだ（「忠導氏家譜」という。

「嘉靖年間、八重山島与那国の首長鬼虎は、己の武勇をたのみ王化に随わず、故に玄雅、命を奉り追討の時、聖上とくに御劍冶金丸を恩借賜る、この恩に謝して帰島し、当地の兵を率いて彼の地方に到り、逆徒を征伐し、凱歌を唱え入朝して御劍を返上す云々」

宝剣の王府への献上は嘉靖元年壬午の年（1522年）、冶金丸は王府から拝借したものだったのか、まさにこの鬼虎征伐の年「嘉靖の初（1522年）」（「忠導氏家譜」）に、仲宗根豊見親の宝剣「冶金丸」は王府に献上されていた。

○五一～五二節、「鬼とらを 草ふきたけ たうすは／おんそよく 嶋鎮 豊たれ」

〔史伝〕 鬼虎を大木の如く（ドウと薙ぎ）たをせば 武運は輝り添え、島は鎮まり、栄えなん

〔庶民史〕 鬼虎を大樹を倒す如く斬り倒した むむそなへ島鎮とよたれ（総て整え島を鎮め名を上げた）（〔史歌集解〕「むゝそなへ」は総ての物事がそなわった意又戦いが済んで神祭りの供物も総て備わったの意であろうか。そして与那国の島を鎮めて、ますます名を挙げたという意である）

<私訳解>

（おきなわ<王様>から、空広よ宮古島をとなめよ（整えよ・鎮めよ）と命令があったので）、仲宗根豊見親は「鬼虎を草ふきたけ（ふさぶきだき）」（草やほこりを掃うように）討ち倒し、武運強く島を鎮めた、（このことで島は）いよいよ豊む（栄える）ことであろう。

「草ふき（ふさぶき）たけ（だき）」（草やほこりを掃うように）鬼虎を討ち倒したとあるのを「史伝」は「大木の如く」、「庶民史」は「大樹を倒す如く」と意識している。これは身長一丈五寸の鬼虎が丈余の大角棒を打ち振って仲宗根豊見親に立ち向かった、その姿からの意識なのであると思われる。

鬼虎は身長一丈五寸（約3.15メートル）、五歳の頃にはすでに身長五尺（1.5メートル）計りであったという（「忠導氏家譜」）。これはまさに王化に随わない逆徒の首魁鬼虎（ウントウラ）のその伝説化された姿をいうものなのである。

（4）鎮まり治まって豊んだのは宮古島だった

稲村は、仲宗根豊見親は「与那国の島を鎮めて、ますます名を挙げた」というのだがどうなんだろうか。鎮まったのは他ならぬ宮古島だったはずである。同じく「雍正旧記」が記載する「弘治年間の頃同人（仲宗根豊見親）嶋の主成候付あやこ（神水のあやこ）」は「八重山入の時あやこ」同様に「空広が豊見親の、あやことそ／おきなから、美御前から、美御声／しまた免る、國た免る、たやまいば」（空広が豊見親のアヤゴをしよう／沖縄から、王様からのお声がかりで／島を鎮めよ、国を鎮めとの仰せであるから）と歌いだされる。仰があって、それでもって仲宗根豊見親は平良、城、下地でそれぞれおもだつ人を集めて「ちきやい水、すつか水、吞す」（誓い水・鎮か水を吞む「神水」の儀式）をおこない王様へ二心なき事を誓い合った。下地地方で「神水」の儀式を終えてのこのあやこの終節は「しま鎮、国豊たら」（しまは鎮まり、国〈島〉は豊み栄えよう）で結ばれる。ここでの「しま・

国」が宮古島のことなのであれば、「八重山入の時あやこ」の終節「おんそよく 島鎮 豊たれ」の「島」もまた宮古島であることは言をまたないことに思われる。

何故に美御声（王様）は「宮古をとなめよ（鎮めよ）」と、空広（仲宗根豊見親）に命じたのだろうか、仲宗根豊見親はまた何故に、王様の命を受けて宮古を鎮めるのに八重山へ打ち渡り（オヤケ赤蜂を平定）して与那国まで討ち治めたのだろうか。稲村は「沖縄から御命令として、八重山島をも平定せよという御命令があった」（「史歌集解」）というのであるが、この「あやこ」からそのことが読み取れるものではない。

<稲村賢敷の「むむそなえ」について>

「八重山入のときあやこ」の終節「おんそよく 嶋鎮 豊たれ」を稲村は「むむそなえ 島鎮め とよたれ」とする。「おんそよく」がなぜ「むむそなえ」となるのか、稲村はこのことにはとくにふれていない。「雍正旧記」（外間本）の写しが市史編さん室にあって、この写しの「八重山入の時あやこ」には「おんそよく」の右側に「むむそなえ」とも読みとれるような文字の跡（朱書の跡？）がみえる。これが「むむそなえ」と読めるのであれば、なぜ「おんそよく」に「むむそなえ」の朱書なのか、このことはよくわからないが、しかし「むむそなえが」が「総ての物事がそなわった意」で、祭式とかかわって「島が鎮まる」ために欠かせないものだとする稲村の説は、この「あやこ」のもつ本質的なテーマ（たんに偉大な仲宗根豊見親の功績を称える歌だけではないような）ともかかわってきわめて示唆的ことのように思われる。

祭式の場（御嶽・神前）で島を鎮めるための総ての物事がそなわって（「むむそなえ」られて）神々へ願い上げられ「あやこ」がうたわれる。「八重山入の時あやこ」はまさにその祭式の場で歌われた「あやこ」だったはずである。このこと（島を鎮めるための祭式）があって「島は鎮まり、豊かな世」が将来される。

## 2 「野原岳の変」と「宝剣・宝玉」の献上

### （1）「雍正旧記」の記事と5篇のアヤゴ

『雍正旧記』の「島中の為メ勲功有之候人由来」の項に収載される仲宗根豊見親にかかわる5篇のアヤゴは、なんのために作られ歌われた「アヤゴ」だったのだろうか、「島中の為メ勲功有之候人由来」の記録は仲宗根豊見親とその一門にかかわる記事とアヤゴからなっている。記事は仲宗根豊見親が「首里（王様）の御錠（おおせ）を蒙り」島主となる経緯を述べた後で「弘治年間の頃、八重山島謀叛の企て之有り候に付き、琉球へ訴え奉り候処、討手の御大将、當嶋へ御下り成られ候間、御供達にて八重山嶋へ罷り渡り、与那国迄討ち治め申し候、其の時より、年貢相極め差上げ申し候、（中略）治金丸刀一振り、む（み）

玉一つ、豊見親永代の宝物にて候処、八重山嶋討治め泰平に罷り成り候間、琉球へ持ち登り（尚真王へ）差し上げ申したる由候、豊見親嶋の主になり候付き神水のあやこ并八重山嶋討治め、両嶋共に上納仕り候あやこ之有り候」とあって、アヤゴは次の5篇が収載されている。

○弘治年間の頃、同人（仲宗根豊見親）島の主になり候付き（神水の）あやこ

○同人定納相調へ、初めて琉球へ差し上げ候時のあやこ

○同人八重山入の時あやこ

○同人八重山入の時、嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女のあやこ、但し鬼虎か娘

○同人（下地村で）神水の後、加那浜橋積み申し為る由候、その時のあやこ

## （2）「野原岳の変」の年代について

仲宗根豊見親の嫡子仲屋金盛は「不屈の儀」（城邊〔ぐすくなぎ〕の首長で仁人として信望の厚い金志川豊見親〔那喜多津〕を、野原岳に招きよせて謀殺したいいわゆる「野原岳の変」）を起こし王府の糾問をうけて自害する。「史伝」はこの「野原岳の変」を嘉靖11（1532）年のこととしている。しかし、この嘉靖11年説は「その依拠不明」（稲村賢敷）であり、根拠があって示されているわけではない。

王府からの糾問をまえに金盛は自害し、糾問使にその家財は接收〔「家財欠所也」（『琉球国由来記』）、「家財を抄没」（『球陽』）される。この罪科によって金盛の「豊見親官」は剥奪され、これ以後宮古独自の統治者の尊称として名乗られた「豊見親」の称号は廃止され、宮古は王府が任命する頭職の制となる。金盛の一人娘まぼなりは「宮僕（おやきこ）」として王府に召し捕われる。忠導氏おやけ屋の大主が誌した古事を在番筆者明有文がまとめた「宮古島記事仕次」は「朝廷には、金盛罪に伏して自殺したるを憐れみ思召し、且つは莫大の勲功あるを以て、いたくも咎み給わずとかや」と記すのであるが、これを文字どおり受け取っていいものなのか、「咎め」は重く深刻なものであったように私には思われる。

この「野原岳の変」によって、仲宗根豊見親を宗主とする忠導氏一門はその統治者としての地位はおろか、一門の存亡にもかかわるような極めて重大な危機に直面したであろうことが考えられる。こうした危機にあたって仲宗根豊見親が一門の再興をはかるために、二心なき臣従の証しとして永代の宝物「地金丸一振り、む（ミ）玉一つ」を王府へ献上（「国王頌徳碑」嘉靖元年・1522年）した。このことで豊見親末子玄屯（馬之子）が平良頭職を始めて仰せ付けられ一門の再興がはかられた。「忠導氏家譜」は、玄屯が頭職に任じられた年を「嘉靖元年（1522年）」のことだと記録している。頭職の制が豊見親の称号が廃されて以後のことで、玄屯がその頭職に初めて任じられたのが嘉靖元年（1522年）だということであれば、「野原岳の変」もまたその嘉靖元年か、その近い前年あたりに起きた出来事

だったということになるはずである。

#### <家財の接収と宝剣・宝玉>

王府の御使者(糾問使)は、金盛のどのような「家財」を接収したのだろうか。「琉球国由来記」、「球陽」ともに、このことについてはなにもふれていない。仲宗根豊見親の嫡子仲屋金盛は「野原岳の変」を起こし王府の糾問を受けて自害する。このときに金盛は仲宗根豊見親から家督を継いでいたのだろうか、王府の正史『琉球国由来記』(1713年)は「仲宗根豊ミヤ跡継ニ、長男金盛豊ミヤニ当島ノ頭被仰付置タルニ、非法ノ儀共有之、」、『球陽』(1743~45年)は「仲宗根豊見親、已に病没の後、長男金盛豊見親、父の家統をつぎて宮古山頭職に陞任す。金盛も亦法を犯し典を壊つ。」と記録している。「跡継」、「父の家統を継ぎて」とあって、「琉球国由来記」、「球陽」ともに金盛は仲宗根豊見親の家督を継いでいたとしている。

金盛が家督を継いでいたのであれば、仲宗根豊見親が伝家の宝物とした「宝剣冶金丸と夜光の宝玉」これもまた、当然に引き継いでいたのではなかったか。王府がもっとも「接収」したかったもの、それが仲宗根豊見親が伝家の宝物と秘蔵した「宝剣冶金丸と夜光の宝玉」であったとしたら、すなわち接収の絶対品目だとされたのであれば、王府からの接収をまえに「宝剣冶金丸と夜光の宝玉」は仲宗根豊見親自らが献上を願っていた、あるいはまたこのようなことも、まったく考えられないことではないように思われる。

しかしながら「球陽」は金盛が父の家統をついだのは「仲宗根豊見親、已に病没の後」のことだと記録している。金盛が父仲宗根豊見親の病没後に家統を継いだのであれば、仲宗根豊見親が宝剣冶金丸と夜光の宝玉を王府に献上した「嘉靖元年(1522年)」以前に「野原岳の変」が起り得るものではないはずである。

『宮古島記事仕次』(1748年)も、金盛が引き起こした「野原岳の変」は仲宗根豊見親の死後に起った事件だとしている。

「球陽」、「記事仕次」の記録をとれば「野原岳の変」は「嘉靖元年(1522年)」以前の出来事ではなく、仲宗根豊見親没後の出来事であって、あるいはまた「宮古史伝」がいうように嘉靖11年(1532年)代のことであったのかも知れない。

しかし旧記の記録は一樣ではない。「球陽」に先だつ「琉球圀由来記」は「仲宗根豊ミヤ跡継ニ、長男金盛豊ミヤニ当島ノ頭被仰付置タルニ、非法ノ儀共有之」で、「跡継」が父仲宗根豊見親の死後か、生前のことなのか判然としないものがある。「琉球圀由来記」はまた「當島(宮古島)役人立始メ〔之事〕」で次のようにも記している。

仲宗根豊見親跡ニ、嫡子金盛相勤め候処、不届きの儀有り、討ち果される可き処、死去の故、豊見(親)末子、童名ウマノコ、嘉靖年間ニ、平良大首里大屋子と為る(「以下略」)

ウマノコ（豊見親末子玄屯）が平良大首里大屋子（頭職名）となった年代を「嘉靖年間」のこととするが（嘉靖年間は1522～66年までの45年間）、「役人（頭役）の立始め」は金盛の「不届きの儀」があった後のことだとしている。

『御嶽由来記』（1705・06・07年、王府に最初に報告された旧記）は「同嶋頭役立始之事」で「仲宗根豊見親跡職は、嫡子金盛に仰せ付け置かれ候処、不届之儀ニ付き、豊見親召し逃され候間、同人（金盛）末弟、字おまのこより平良大首里大屋子（頭役名）を始めて仰せ付けられる。（以下略）」と記して、これも頭役の立始めは金盛の「不届きの儀」があった後のことだとしている。（「琉球国由来記」の先の記録は、この「御嶽由来記」の王府への報告があつての記録だとされている。）

『雍正旧記』（1727年）は「不届きの儀」（野原岳の変）があつて「豊見親官」が廃され、王府の任命で「頭役」が立ち始まったのが「嘉靖之始頃」だと記録している。

「忠導氏家譜正統」は、玄屯が始めて「頭職」に任じられた年を「嘉靖元年壬午（1522年）」と明記している。

こうした記録をとれば「野原岳の変」は仲宗根豊見親がまさに健在であつて「宝剣・宝玉」を献上した「嘉靖元年（1522年）」か、その近い前年あたりに起つた出来事であつたように思われる。そうであれば王府による金盛の家財の接収が迫る中であつて、仲宗根豊見親がこのことにはたしてどう対応したものであつたのか、先に記したようなこともまったく考えられないことではないように思われる。

「野原岳の変」を仲宗根豊見親の死後のこととする「球陽」「記事仕次」は、金盛の「不届きの儀」については詳述するが、その後にウマノコが「頭役」に任じられたことについては、何故か何も記していない。みてきたように金盛の「不届きの儀」とウマノコの「頭役立始」が不可分にかかわるものであれば、「球陽」「記事仕次」のこうした記述は何かしら奇異の感を思わせるものがある。

### （3）「与那国鬼虎征伐」と「宝剣・宝玉」献上について

宝剣・宝玉が尚真王に献上された年代は、先に述べたように「国王頌徳碑」（石門之東の碑文）「首里おきやかもいかなしの御代にみやこよりち金丸みこし・み玉のわたり申し候時にたて申し候ひのもの」に「大明嘉靖元年壬午十二月吉日」と刻され、「球陽」の記事にも「尚真王四十六年（嘉靖元年・1522年）宮古山鯖祖氏玄雅、宝剣を献上す」の記録があり、また「御嶽由来記」も「地金丸御美腰并御玉嘉靖元年壬午の年、おきやかもいかなし（尚真王）御守に豊見親献上す」とあることなどで、「嘉靖元年（1522年）」のこととされている。

しかし「忠導氏家譜」（1757年）はこうした多くの先行する記録がある中で、なぜか「宝

剣・宝玉献上」は弘治年間八重山平治の慶賀のため、玄雅夫婦、命を奉じ中山に朝見の時、治金丸と称す宝剣一口、宝珠一顆を献上す」といって、オヤケ赤蜂の乱（1500年）平治の慶賀の時のこととする。このことは「雍正旧記」の「島中の為メ勲功有之候人由来」が記す先の記事とそのまま符合するものとなっている。

宝剣・宝玉の王府（尚真王）への献上と、玄屯（馬之子）が平良頭職に始めて任命されたと記録される「嘉靖元年（1522年）」、この年はまた「忠導氏家譜」が「与那国鬼虎征討」を「嘉靖年間・嘉靖之初」の事と記録する年でもある。こうした大きな出来事がこの嘉靖元年という年に、同時にというか、続けざまに起きたと記録されている。この嘉靖元年という年は宮古島がまさに鳴動し突き動かされて、歴史の大きな転換をもたらした、その一点となった年であったように思われる。然してこのことはまた挙げて「野原岳の変」から始まった（引き起こされた）かのようなのである。（「野原岳の変」これもまた嘉靖元年に起った出来事であったと思われることは先に述べた。）

＜「忠導氏家譜」の「鬼虎征討」の記録は伝説化されたものか＞

嘉靖元年かその前年かに、金盛が引き起こした「野原岳の変」があつて、仲宗根豊見親とその一門が、また宮古島そのものが動揺していた。このことで一門の長として、また島の統治者として、仲宗根豊見親が執り行なつた祭式の重い営みがあつたはずである。島の主長となって以来かつて経験しなかつた一門の危機をまのあたりにして、苦悩しながらもこの危機を乗り越えて、一門の再興と安泰をはかるために祭式を執り行い神々に重く願ひ上げねばならなかつた、そのためにアヤゴが作られ謡われて神々に願ひ上げられた。仲宗根豊見親にかかわる先の5篇のアヤゴはまさにその祭式の場でうたわれた「あやこ」であつたはずである。「神水のあやこ」で王府に二心なきを誓ひ、豊見親の最盛期の栄光を物語る「八重山入り」（弘治年間八重山討治）を謡ひ上げることで、泰平の世の再現が願ひあげられた。

宝剣・宝玉の王府への献上、このこともまた、この祭式の場で先祖の神々へ重く願ひ上げ報告されての献上であつたのであろう。「八重山入りの時あやこ」は仲宗根豊見親が宝剣治金丸を勇壯に打ちおろして鬼虎（ヤーマウントウラ）を打ち倒す場面を象徴的に歌ひ上げている。アヤゴは仲宗根豊見親を歌つて、その歌の内容は複合的な重なりをもって祭式の場でうたわれ願ひ上げられた「アヤゴ」であつたように思われる。このことが後に伝説化され史実とされて「与那国鬼虎征討」は「嘉靖年間・嘉靖之初」にあつた歴史的出来事として「忠導氏家譜」に記録された。

「忠導氏家譜」が宝剣・宝玉の献上を「嘉靖元年（1522年）」ではなくて、「弘治年間、八重山平治の慶賀の朝見」（1500年の八重山オヤケ赤蜂討治）の時とするのもこのことが

あつてのことであろうと思われる。仲宗根豊見親にとっては、嘉靖元年に与那国鬼虎を王命によって征伐したのであれば、治金丸の嘉靖元年献上はあり得ないことであつて、献上はまさしく「弘治年間八重山平治の慶賀の朝見」の時でなければならなかったはずである。

## おわりに

「八重山入の時あやこ」で歌われる「八重山の人」と「与那国の鬼虎(ヤーマウントウラ)」とは、歌(句詞)の前後を見ていく限りにおいては、私には全く同一人物であるように思われるものがある。

何故に美御声(王様)は「宮古をとなめよ(鎮めよ)」と、空広(仲宗根豊見親)に命じたのだらうか、仲宗根豊見親はまた何故に、王様の命を受けて宮古を鎮めるのに八重山へ打ち渡り(オヤケ赤蜂を平定して)与那国まで討ち治めたのだらうか。

「八重山入の時あやこ」は祭式の間(御嶽、神前)でうたわれた。この「あやこ」の大意を、「おきなわの王様から、宮古を鎮めよ、島を治めよとの命令があつて、仲宗根豊見親はその命を受けて、島を鎮め治めるために神前で祭事を執り行った。神前で「むむそなへられて(総ての物事がそなわつて、神祭りの供物も総て備わつて)」「(史歌集解)祭事が行なわれた。こうして神前で願ひ上げ成すべく事を総て成したことであれば、宮古島は鎮まり治まつて、いよいよ豊み栄えていくことであらう」と読みとれば、この歌の本質的なテーマもまた見えてくるように思われる。

「野原岳の変」があつて、島(民衆)が騒動し鎮まらなかった。庶民が父母のように慕い崇敬する金志川豊見親を、金盛が讒言を信じて害したと王府に訴えてたので「主君おおきに逆鱗あつて金盛を召して糾問あるへしと命し給ふ」「(記事仕次)、金盛が(まさに仲宗根豊見親とその一門が)王府の咎めをうけて、危急存亡のせとぎわに立たされた。この危機を乗りこえるために仲宗根豊見親は王府への二心なきを誓ひ「宝剣・宝玉」を献上し、宮古にあつては一門(民衆)の動揺を鎮め、その再興と安泰をはかるべく神前で祭事を執り行った。その祭式の間で「八重山入の時あやこ」が謡われ神々に願ひ上げられた。

「あやこ」で名揚げされて歌われる「20人の手まさりゃ(武芸者)と4人の津かさ(神女)」、「八重山入の時あやこ」の特筆すべきは、この宮古各地の有力者を次々と名揚げしてうたう場面にあるとされている。このことで思うのは、「八重山入の時あやこ」が「野原岳の変」があつて危機に陥った仲宗根豊見親とその一門が、仲宗根豊見親とその一門の再興と安泰を願つて祭事を執り行った、その祭式の間でうたわれた「あやこ」なのであれば、この「あやこ」はまた、もうひとつの切実な願ひをも籠めてうたわれた「あやこ」であつたように思われることである。

「野原岳の変」で無念の死を遂げた金志川那喜多津、(その以前に兄の金志川金盛、これも仲宗根豊見親にかかわっての無念の死があった、おそらくはオヤケ赤蜂征討の際に。)、その金志川那喜多津を野原岳で謀殺して王府の咎めをうけて自害した仲屋金盛、また仲宗根豊見親が薙ぎ倒した「鬼虎(オヤケ赤蜂)」その人も、こうした無念の死を遂げた人たちの魂をしずめ鎮魂する。このことは一門の再興と安定のために是非にも必要とされたことであったはずである。「八重山入の時あやこ」はこうした鎮魂の願いも籠められて神前でうたわれたアヤゴであったように思われる。

「島中の為メ勲功有之候人由来」は「同人八重山入の時あやこ」の次に「同人八重山入の時、嫡子仲屋の金盛豊見親捕参候女のあやこ 但し鬼虎が娘」を収載している。仲宗根豊見親の勲功をいうに、何故に捕えられて宮古に連れこられ奴婢としてこき使われて、絶望の果てに縊死する鬼虎の娘の、その悲惨な姿を敢えてうたい記録にとどめたのであろうか、これもまた私の論からすれば、一門の再興と安定のためであって、悲惨な死を遂げた鬼虎の娘のその浮かばれがたい魂を鎮め慰撫鎮魂する必要があったからだということになる。

「同人(仲宗根豊見親)八重山入の時あやこ」は「英雄の功績をたたえた歌であるから英雄叙事詩といいいい」(「史歌集解」)このことを否定するものではないが、これまでみてきたようにこの「あやこ」は、実に複合的な重なりをもって祭式の場でうたわれた「あやこ」であったように私には思われる。このことをここまで述べてきた、これで本稿を結ぶことにする。